

ある邂逅

——フリーダ・ロレンスの謎——

井 上 義 夫

1974年に出版されたマーティン・グリーン (Martin Green) の著書『リヒトホーフェン家の娘たち』(*The von Richthofen Sisters*)¹⁾ は、D. H. ロレンスの妻となったフリーダ (Frieda) とその姉エルゼ (Else) の若き日々を明るみに出した。マックス・ウェーバー (Max Weber) とオットー・グロス (Otto Gross) に係わる彼女らの秘められた過去が、今世紀初頭のヨーロッパの思想状況を背景にくっきりと描き出されたのである。しかしロレンスとフリーダとの出会いに関しては、1972年にドイツ語で出版され、翌年英訳されたロバート・ルーカス (Robert Lucas) 著『フリーダ・ロレンス』²⁾ の通説に対し、格別新しい視点を提供することなく終った。

ここに言う通説とは、フリーダ自身が広めた後述する「1912年4月説」であるが、私が知る限り、これに対して最初に異を唱えたのは、1969年に『D. H. ロレンス——人とその作品の生成』*D. H. Lawrence: L'Homme et la genèse de son œuvre* を上梓したエミール・デラヴァニ (Emile Delavenay) であった。若き日のロレンスの恋人にして『恋しい息子たち』(*Sons and Lovers*) のミリアム (Miriam) のモデルとなったジェシー・チェインバースー (Jessie Chambers) は、1935年にE. T. の仮名で回想記『D. H. ロレンス』を出版したが、これに収録されなかった原稿³⁾ に依拠して、ロレンスとフリーダが邂逅した日を、1912年3月14日から21日までの或る一日に限定したのである⁴⁾。

1974年に改版されたハリー・T・ムア (Harry T. Moore) のロレンス伝『愛の高僧』(*The Priest of Love*)⁵⁾ は、二人の出会いを1912年4月初めのこと

とした上で、後述するキース・セイガ (Keith Sagar) の調査を紹介し、この時よりずっと以前に二人が相識であったとする説の存在について言及した。セイガ自身は、1980年の出版になる『D. H. ロレンスの生涯』(*The Life of D. H. Lawrence*) で、「1912年3月初め、ロレンスはドイツで教職を得る可能性について相談するために、以前教わったことのあるアーネスト・ウィークリー (Ernest Weekley) を訪ね、その妻のフリーダに会ったと述べた⁶⁾。ロレンスの研究者として現在最も権威あるセイガが、長年にわたる調査の結果「1912年3月説」に決したばかりでなく、ケンブリッジ大学出版局による歴大な書簡集編集者も、デラヴァニの説を採用して1912年3月17日を最も可能性の高い日と推定した⁷⁾以上、この問題はすでに決着のついた問題であるように見える。私は未だ諸家の説をくつがえす決定的資料を見出していないが、ロレンスとその家族に関する通説はすべて疑ってかかるべきであるという立場はなお有効であると信じるから、以下この問題に少しく検討を加えようとするのである。

ロレンスの死後4年目に当たる1934年に出版されたフリーダの回想記『私ではなく、風が……』(*Not I, But the Wind……*) に従えば、当時アーネスト・ウィークリー教授夫人であった彼女がロレンスに初めて会ったのは、「1912年4月の或る日」、ロレンスが、ドイツの大学での講師職についてウィークリー教授に相談するため昼食に訪れた日のことであるという。

いまま私の眼の前を、家に入ってくる彼の姿が横切^{よぎ}る。痩せた長身で、まっすぐ歩を運ぶ素早い脚と、軽い確かな身のこなし。誰の目にも、彼は単純にして明快な人間に見えたが、にもかかわらず私はその姿に注意を惹きつけられた。そこには、目に見えるものを超えた何かがあった。これはどんな種類の鳥なのかしら？ 私はそう思った。

昼食の前の三十分間、私たち二人は私の私室で話した。開いたフランス窓のカーテンが春の風に揺れ、芝生の上では子供たちが遊んでいた。

女性を知ろうとすることなど、もうやめにしました。——彼はそう言った。

私は、激しく女性を弾劾するその口調に驚いた。その種の調子は、私にはまったく馴染みのないものだったから。——私は笑ったが、彼が女性に関心を抱き、一所懸命になって女性を知ろうとしてきたのだということは理解できた。二人がオイディプスについて話すうち、弾むような理解のきざしが、お互いの言葉にとび交った。

その夜、彼は辞去したあと、歩いて家に帰った。少なくとも五時間はかかる道のりだった。「英国中で、あなたは一番すばらしい女性だ」——やがて届いた手紙にはそう書いてあった⁸⁾。

大学教授夫人と夫の教え子との感動的な出合いを綴った文章であるが、今日この話を鵜呑みにすることは不可能である。フリーダの記憶は、第一にいちじくらしく不正確である。たとえばこの年彼女は31歳であったと記されているが、1879年8月生れの彼女は、1912年4月には満32歳でなければならない。第2に、その回想は、当時を振り返った他の人々の回想との間に齟齬を来す。のみならず彼女が、世の通念にいう「大学教授夫人」らしからぬ女性であったことは、問題の回想記によってさえ感知できるからである⁹⁾。

フリーダの回想記に係わる疑問はさて置き、1912年3月から4月に至る、最も信憑性の高いと考えられるロレンスの行動について記せば、以下のごとくである。

3月8日(金)、シャープブルック(Shirebrook)のダックス夫人(Mrs Dax)宅からイーストウッド(Eastwood)に戻ったロレンスは、翌日ウィークリー教授が書いた昼食招待の手紙に接した。10日の日曜日、彼はジェシー・チェインバーズに会った際、「行きたくないから」招待を断ったと語ったが、数日のちには、「結局ウィークリー家には行かなければならないと思うな。夫人から招待の手紙が来たからで、僕には夫人の申し出を断るわけにはゆかない。けれども昼食のあとで君に会う」と言った。3月17日(日)、ウィークリー家に赴いた彼は、約束通り午後ジェシーに会った。その折ロレンスは、ウィークリー夫

人と知合いになるのはジェシーのためになると言い、暗に二人を引き合わせる意図を仄めかしたが、ジェシーは、他人の庇護を受けるのは御免だということで、彼の誘いを拒けた。夫人はフランス人なのかと彼女が尋ねると、ロレンスは少し当惑気味に、「ドイツ人だよ、モダンなドイツ人だよ」と話した。こののち彼らはチェインバーズ家に行き、お茶のあとのひとときを、ジェシーの妹と二人の兄弟と一緒にフォークソングや讃美歌を歌って過した。やがて居間で二人きりになったとき、ロレンスは彼女に向かって「君といっしょに居ないと……別れてからこの方、以前と同じように感じたり、考えたりすることができない……僕は同じ人間じゃないんだ。詩が書けない」と「痛々しいほど卒直に」語った¹⁰⁾。

25日(月)から一週間、ロレンスは友人のジョージ・ネヴィル(George Neville)をスタッフォードシャー(Staffordshire)のリーク(Leek)に訪ね、滞在3日目に当たる27日(水)、ジェシーの姉メイに宛てた手紙のなかで、「ウィークリー夫人には〔彼女を伴いメイの家を〕訪問する件について何も話さなかった。君とさらに話をつめる」と書いた¹¹⁾。31日(日)リークを発ったロレンスは、イーストウッドに戻ると、直ちにメイの家に向った。バーナード・ショー(Bernard Shaw)の『人と超人』(*Man and Superman*)をメイに手渡す約束があったし、ジェシーと落合い『恋しい息子たち』の初稿『ポール・モレル』(*Paul Morel*)の感想を聞く手筈を整えてあったからである¹²⁾。

この日、ただでさえ接続の悪い列車は、地方公演の劇団の一団が荷物の積みかえに手間どったために大巾に遅れた。イーストウッドの駅からメイ家まで、重いスーツケースを持ち運ばねばならなかったロレンスは、疲労困憊して機嫌斜めだった。翌4月1日の午後早く、再度メイ家に姿を現した彼は、午前中遅くまで床の中にいたにもかかわらず、前夜まったく眠っていないように見えた。この日のロレンスは、『ポール・モレル』がジェシーを立腹させたのではないかという危惧を抱いていたようだったが、ジェシーが強い何とも言わず、原稿にメモをはさんでおいたとだけ告げたのちは、見違えるように元気を取り戻した¹³⁾。

この原稿とメモにより、ロレンスは『ボール・モデル』を一週間以内に仕上げるべく改作に着手した。5日(金)には、戯曲『或る坑夫の金曜の夜』(*Collier's Friday Night*)の原稿をエドワード・ガーネット(Edward Garnett)に郵送し、同日落掌した『侵犯者』(*The Trespasser*)の校正刷第一冊の校正にとりかかった¹⁴⁾。「復活祭の月曜」に当る4月8日の午後には、しかし、妹のエイダ及びかつての婚約者ルイ・バロウズ(Louie Burrows)と一緒にイーストウッドの『エンパイア』座に映画を見に出かけたりもした¹⁵⁾。

4月17日、エドワード・ガーネット宛書簡で、ロレンスは初めてフリーダについて語った。ウィークリー夫人は「完全に因襲にとらわれない女性」だが、本当に素晴らしい「僕にとっては生涯の女性だ」、翌週彼女もロンドンに出るから、二人を招待してくれると有難いという文面である¹⁶⁾。

4月23日(火)イーストウッドを発ったロレンスは、レスター市(Leicester)の母方の叔母エイダ・クレンコウ(Ada Krenkow)の家に一泊し、翌日ロンドンに行き、母方の従妹エセル・ハンガー(Ethel Hunger)の家に3泊したのち、27日(土)から2日間、フリーダとともにガーネット家の客となった。29日(月)、ロレンスはレスターの叔母の家に戻り、フリーダは二人の間柄を夫に告白すると約束した。彼女が家を出たのは5月1日(水)¹⁷⁾であるが、この頃から、アーネスト・ウィークリーは半狂乱におちいった¹⁸⁾。ロレンスとフリーダがチャリング・クロス駅(Charing Cross)で待合せ、ドイツ行を共にしたのは5月3日2時頃のことである¹⁹⁾。

いま順を追ってフリーダの回想記を辿れば、前記「4月のある日」ウィークリー一家の客となったロレンスが、フリーダは英国中で最もすばらしい女性だと書いてきた手紙の返書に、彼女は、「イギリスには知らない女性もたくさんいるのに何故そんなことがわかりますか」と認めた。復活祭の日曜日、つまり4月7日にロレンスは再びウィークリー家に現れた。女中が外出して留守だったため、フリーダは自分でお茶を入れようとしたが、満足にコンロのつけ方も知らないのを見たロレンスは不機嫌になった。また「或る日」、フリーダは二人の

娘と一緒にダービシャー州 (Derbyshire) の或る駅でロレンスと落合い、森や野原を散歩したことがある。石造りの橋の下を流れる小川にさしかかると、ロレンスは子供たちに紙の舟を作ってやり、マッチの棒をのせて水に浮かべた。無心に遊ぶその姿を見ているうちに、彼女は突然彼を愛していることに気付いた。こののち事態は急速に進み、ロレンスが夫の留守中に訪ねてきた「或る日曜日」、彼女がロレンスに泊ってゆくように勧めると、彼は、「ご主人がいない家に泊るなどということはできない。ご主人にほんとうのことを話せば、そのあとで僕たちは一緒に出てゆける。僕はあなたを愛しているのだから」と語った。「つねに夫から信頼されていた」フリーダは、ロレンスとの出奔が与える打撃の予感に逡巡したもの、翌日長男を家に残してウィークリー家を出、二人の女兒をハムステッド (Hampstead) の祖父母に託してチェアリング・クロス駅でロレンスに会った。彼らがドイツに着く前日のことであり、このとき、二人は知り合ってから6週間にもなっていなかったというのである²⁰⁾。

いったい何故ロレンスはウィークリー家に招待されたのであろう。フリーダの言うように、かりにドイツでの教職についてウィークリー教授に相談するつもりなら、教授の招きをまず断り、フリーダの度重なる招待で腰を上げるような事態は何故生じたのか。ドイツ行き話が出てのち、ロレンスは一言もドイツで教鞭をとる意図など洩していないし、小学校の教師であった彼が、ドイツの大学で外国人講師の職を得るなど、当時誰の目にも不可能に思えたことに違いない。ロレンスがルイに語ったのも、「生きたフランス語とドイツ語の知識があれば、必要な場合にいつでも中等教育 (secondary) の職にありつける」というほどのことでしかない²¹⁾。教職から解放された欲びに弾んでいた彼が自らウィークリーに教職の口を依頼する筈がないとすれば、いったいこの招待の話はどこから出た話なのか。そもそもウィークリー教授がロレンスに招待状を送るためには、クィーンズ・スクエア 13 番 (13 Queens Square) のエイダの住所を予め知っておく必要があるが、彼はどのようにしてこの知識を得たか²²⁾。或いはまた、1912 年 1 月 12 日付書簡²³⁾で初めて言及される義理の叔父クレン

コウのドイツに住む親戚ハンナ (Hannah) 訪問の時期は、フリーダの父親の入隊 52 周年記念日とほぼ同時期に当たっている。単なる偶然の一致と呼ぶには、これはあまりにもできすぎた話ではないか。つまりフリーダのドイツ行きが確定的であった同じ年の同じ春に、ロレンスにもドイツに住む親戚から招待状が来たというのは奇妙ではないか。おそらくフリーダがドイツ行きの計画を立て始めていた頃、ロレンスは 2 月 12 日付書簡で、「当地は鉛色の天候。5 月に僕はドイツに行きます。ああ早くその日が来ればいいのに (God speed the day)」²⁴⁾と書き、2 月 23 日付書簡では、「5 月初旬のドイツ行に合意した (agreed)」²⁵⁾と記した。3 月 17 日に先立つ、約 1 カ月前のことである。

もっともこの日以前に、二人の間に面識があったとするためには、やがて 5 月 9 日付のガーネット宛書簡で、「[フリーダと] 知り合ってから 8 週間にしかない」²⁶⁾と書くロレンスが、ガーネットに虚偽の事実を含ませたと想定してかからねばならない。考えられる理由は、離婚問題が出来した場合の予防措置というほどのことでしかない。事実 1913 年 10 月のノッティンガム・ガーディアン紙 (Nottingham Guardian) には、離婚訴訟に関連してロレンスの 5 月 8 日付 (推定) ウィークリー宛書簡が掲載された²⁷⁾から、かつて懇意にしてもらったフォード・マドックス・ヘフナー (Ford Madox Hueffer) とヴァイオレット・ハント (Violet Hunt) をめぐる離婚話の一部始終を知るロレンスが、何らかの配慮を働かした可能性が皆無であったとは言えない。以前から親しかった夫の教え子をフリーダ自身が自宅に招いたというより、夫を頼ってきた見ず知らずのロレンスと相識になったとする方が、話の通りはいい訳である。

この点に関して、ジェシーが書きとどめた意味深長なロレンスの言葉は何ごとかを示唆するようである。

「ガーネットは僕に喋らせたがったけれど、[酩酊してもなお] 僕はいつも自分が何を喋っているか意識していた。彼はすべてを聞き出したと思っているが、僕は全部話したわけではない。たしかにほとんど全部話した。けれどもまだ話していないことがいくつか (some things) あったんだ。」²⁸⁾

前記3月31日にメイ家を訪れる以前のロレンスの言葉である。彼がガーネットに明さなかった事柄の一つが、その戯曲の評価であることはルイ宛書簡によって想像できる²⁹⁾ (1911年11月10日付)。ガーネットの戯曲は「生きていないから、好きでない」というものだが、単にそれだけのことであれば「妙な調子で」(quaintly) とジェシーが記した、もって回った言辞を弄さねばならない理由がない。彼の女性関係もまた、ロレンスが秘匿しておかねばならない主要な秘密であったと考えることもできるのである。

ロレンスの女性関係について最も詳しい情報を得ていたネヴィルは、1912年5月に二人がはじめて会ったとする J・M マリの説に対し、「そのときよりもずっと前に」ロレンスはフリーダを知っていたと書き残している³⁰⁾。彼はしかしフリーダより先に他界したから、存命中のフリーダとの関係の内実については一言も語らなかった。(ジェシーとルイに関しても、ネヴィルは彼女らのプライバシーを侵害する事実を記していない。)

或いはノッティンガムに住んでいたロレンスの兄のジョージは、フリーダがヴィカーズ通り (Vickers Street) にいた頃、彼の住居が向いのシカモア通り (Sycamore St.) にあった関係で彼女をよく知っていたと語っている³¹⁾。

私が調べた限り、Ernest Weekley の名が、ノッティンガム州の Directory (地誌、紳士録を兼ねたような案内書) に登場するのは、1901年版 *Wright's Directory* が最初で、その身分は Prof. of French at University College, 住所は 9 Goldswong Street となっている。1904年まで各年ごとに同じ記事が現れ、1905—6年版で初めて 8 Vickers St. に変ったのち、1908年版 *Kelly's Directory* まで同じ住所が記される。

Cowley, Victoria Crescent, Private Rd. Notts の新住所が現れるのは、1910年版 *Wright's Directory* が最初である。引用したフリーダの自伝の一節で言及されるのはこの住宅街の閑静な屋敷であり、現存する家屋も往時の面影を彷彿させる。(ちなみに、9 Goldswong St. と 8 Vickers St. の家は、「大学教授」や「貴族の娘」という言葉にはあまり似つかわしくない家屋である。ウ

ウィークリー家が当時さして豊かでなかったことは、フリーダの手紙によっても理解できる³²⁾。)

1912年の *Wright's Directory* を最後に、この住居表示は消え、1913—14年版以降、ウィークリーの住居は 30 Clarendon St. とされるが、言うまでもなくこれは、フリーダの出奔による醜聞にそなえ、ウィークリーが子供をハムステッドの両親にあずけ、自らも転居したためである。

ロレンスがノッティンガム・ユニヴァーシティ・カレッジ (Nottingham University College) に入学したのは1906年9月であるから、2年間の在学中、ウィークリー夫妻が、ヴィカーズ通り8番に住んでいたことは確実である。

ジョージの長男アーネストの談話から判断しても³³⁾、ジョージ・ロレンスの一家が、少なくとも1898年以降シカモア通り (現在のハンガーヒル・ロード (Hungerhill Road)) に住んだことは疑えないし、1909年8月の彼らの居所は、ローレル通り (Laurel Street) 43番であったという。シモア通りはローレル通りの北端と交る通りであり、この通りの最西端は、フリーダの居所から50ないし60メートルのところにある。アーネストの談話には、ジョージとフリーダは面識がなかったと思わせるような箇所があるが、大学在学中に兄の家を訪ねたロレンスが、ウィークリー教授夫妻と路上で出喰わすことがなかったとはいえないのである。

或いはまた、ウィリアム・ホプキン (William Hopkin) の娘イーニド (Enid) は、フリーダを同伴したロレンスが、フリーダを彼女の母親のサリー (Sallie) に紹介するため、1912年5月初めに先立つ「6週間以前まえ、ことによると数ヶ月前」にやってきたと述べた³⁴⁾。サリーに宛てたロレンスの手紙〔1912年6月2日付〕³⁵⁾に照しても、この回顧談は信頼できる。つまり少なくとも同年3月20日頃までに、フリーダはイーストウッドにあるホプキン家を訪ねていたということである。

またノッティンガム・ユニヴァーシティ・カレッジ在学中の同級生 J. H.

レインズ (Raynes) によれば、ロレンスはよく教室の最後列に坐り、中途退室をして「その講師の若い夫人」を訪ねていたともいう³⁶⁾。アーネスト・ウィークリーは当時「講師」ではなく近代語教授であったが、ロレンスはそのフランス語の講義を受講したことは確かであり、同カレッジから彼の住居までの距離は 1.5 km ほどでしかなかった。

ノッティンガム・カウンティ・ライブラリー (Nottingham County Library) のディヴィッド・ジェラード (David Gerard) はこの件についてテイラー夫人 (Mrs Taylor (旧姓 Stout)) に尋ねている³⁷⁾が、92歳のテイラー夫人の返答は要領を得ない。講義は大教室で行なわれたから見とがめられずに容易に退室できたということが、確認できた唯一のことである。ウィークリーがロレンスに関心を持ち、自宅に呼んだときにフリーダはロレンスに初めて会ったこと、何度も会ったのちにロレンスは彼女をイーストウッドに連れてゆき、やがて二人は駆け落ちをしたこと等についても語られているものの、その時期は定かでない。

ここにいっそうめざましい証言は、エイダと同じ小学校で教鞭をとっていたアガサ・バーカムショウ (Agatha Burcumshaw) の証言である³⁸⁾。彼女によれば、大学在学中ロレンスはウィークリー教授の自宅で個人教授を受けたことがあり、このとき相識になったフリーダは、ロレンスがクロイドン (Croydon) で教え始めたのち、帰省した彼を訪ね、二週間に一度か、時にはさらに頻繁に、リンクロフト (Lynn Croft) のロレンス家を訪れたことがあったという。バーバリーのコートにタマシャンター (円形の縁なし帽) といういでたちのフリーダは、必ず女兒二人を連れていたが、あるとき、エイダの小学校の校長のウィルソン (Wilson) は、ロレンスとウィークリー教授夫人との交際を小耳にはさみ、ロレンスが妹とアガサに会いに小学校に来るのを禁じた。エイダはフリーダを嫌ったが、ジェシーに嫉妬していた母親のリディア (Lydia) は二人の交際を黙認した。ジェシー自身も二人の交際を知り、友人のメイベル・サールビー (Mabel Thurlby) に危惧を洩したことがある。あるときウィークリー教授は外出した妻を尾行し、ノッティンガムのコルウィックの森 (Colwick Woods)

でロレンスと対決し、彼を殴打したため、ロレンスは自転車に乗ることができず、イーストウッドまで歩いて帰り、二、三日寝込んだ。それでもフリーダはなおひるむことがなかった、というものである。

これら一連の話は、1970年4月、アガサと彼女の夫が、キース・セイガに語った話であるが、セイガによれば、メイベル・サールビー（すなわちコリッシュ夫人 (Mrs Collishaw)）もこの話が全て真実であると認めたという。他方キース・セイガは、ある時期このロレンス・フリーダ旧知説に傾いたものの、時を経るに従いその信憑性を疑い始め、ハリー・T・ムアが、彼の話を紹介するに至って、一文を草してこれを撤回した。他の女性がフリーダと混同されたか、『恋しい息子たち』の記述が現実に混入したというのである。

ちなみにバーカムショーは、これに先立つ5年前ジェラードとのインタビュー³⁹⁾で、フリーダのロレンス家訪問とリディアの歓迎ぶり、校長の反応について同趣旨の証言をした上で、この事実を立証するため、フリーダの書いた書評の一節に言及している。「ロレンスと私が、初めて彼の生れた醜い場所^{プレイス}に滞在したとき……私はたった2ペンスの小さなパンジーの花束がどんなに彼の母親を喜ばせたかを思い出した」⁴⁰⁾という文章がそれに当たると思われるが、この文章は、さまざまな解釈の余地を残しているから決定的な証拠とはいえない。しかしアガサの口調には確乎たる信念が感じられるし、フリーダ以外に、女兒二人を連れてロレンス家を訪ねたと思われる女性は考えられない。ロレンスが最初に性的交渉をもったダックス夫人には当時1908年に生れた長男がいただけであるし、1912年までイーストウッドの「知名人」であった彼女が、他の女性と混同される筈がない。さらには、素足にサンダルばきという出立ちで周囲の人々を驚かせた彼女は、バーバリーのコートとは最も縁遠いようにも思われる⁴¹⁾。クロイドンの下宿の女主人ジョーンズ夫人 (Mrs Jones) は、なるほど1903年と1908年に生れた女兒二人の母親であったが、ロンドン・ノッティンガム間はグレイト・ノーザン・ライン (The Great Northern Line) を利用して約3時間、これにクロイドン・ロンドン、ノッティンガム・イーストウッドの所要時間等を加えると、最低4時間の長旅になる。彼女が頻繁にイーストウ

ッドを訪れる現実的可能性は少ないばかりでなく、そもそも下宿で始終顔を合わす機会があった彼女には、イーストウッドに来なければならない必要すらないのである。

ノッティンガム在住の関係者による証言を除外して興味深いのは、コンプトン・マッケンジー (Sir Compton Mackenzie) の自伝小説『南風』(*The South Wind*)の一節である。ロレンスはその小説にダニエル・レイナー (Daniel Rayner), フリーダはヒルダガード (Hildegarde) という名で登場するが、マッケンジーが紹介するレイナーの経歴によれば、「彼はバーミンガム大学の学生であった頃、その市の著名な医師のドイツ人の妻に会い、二人は、英国の田舎の生活の居心地の悪さとその生活に対する共通の憎しみによって惹きつけられ、恋に落ちた」⁴²⁾とされる。1914年夏、マッケンジーはパークシャーの小屋にロレンス夫妻を訪ね、1919年12月末から翌年2月末までイタリアのカプリ島では親しく交際した。「人名と場所を別にすれば、その中に書かれた事実と会話の大部分は正確である」⁴³⁾という彼自身の言葉と他の事実の照応関係によっても、彼がカプリ滞在中にロレンスの経歴についてかなり詳しい話を聞き出した可能性は大きいのである。

フリーダの自伝はこの著書が出版される6年前の1934年に出版されている。マッケンジーの記述とフリーダのそれが異っている理由は、彼女の自伝を読まぬまま彼がカプリで聞いた話をそのまま用いたか、読んだにも拘らず彼女の説を採用しなかったか、のいずれかであろう。

『南風』の1914年秋の件りには、著者に相当するジョンに、『ピーター・パン』の作者J・M・バリ (Barrie) と離婚して当時ギルバート・カナン (Gilbert Cannan) の妻となっていたメアリ (作中のロドニー (Rodney) 夫人) が、レイナーとヒルダガードの駆落ちの一件を知っているかと尋ねる場面がある。彼女の説明によれば、ヒルダガードは、当時「バーミンガムの代表的な医師の一人と結婚しており、レイナーはバーミンガム大学に在学していた。そしてその医師が彼に好意を抱いて何度も家に招いたのだと思う。いずれにしろレイナー

は彼女に恋をし、二人はいっしょに墮落ちをした。離婚が成立して、いまは正式に結婚している」⁽⁴⁴⁾ ことになっている。この会話ののち、マッケンジーはカナン夫妻とロレンス夫妻を訪ねたのであるが、カプリ島の件の方が詳しくレイナーの経歴に触れているから、私はマッケンジーが、カナン夫妻経由で聞いた話と自ら取材した話を総合したのだと想像する。前者の場合にも、ロレンスは学生時代にフリーダを知っていたと解される書き方がされているが、両者に共通するのは、卒業後何年かのちに、夫の助言をえるために初めてウィークリー家を訪ねたロレンスをフリーダが見初めたという劇的な出会いが欠けているということである。離婚が成立し、1914年7月に正式に結婚したあと、ロンドンやカプリ島の文学仲間の世界では、もはや体裁をとりつくりう必要がなかったと考えるのは想像がすぎるといえるものであろうか。

これらはすべて直接資料の裏づけを欠く証言ないしはフィクションであるから、結局のところロレンスがフリーダに出合った時期は確定できない。さらにたとえ二人が1906年頃から相識であったにせよ、両者の関係が当時、肉体関係を想定させるような親密な関係でなかったこともほぼ確実である。それは、ジェシーとヘレン・コーク (Helen Corke) の「健全な」性道徳に対してロレンスがあれほど激しく挑みかからねばならなかった事態が雄弁に物語っていることである。

にもかかわらず、二人の邂逅時期が問題となるのは、大学時代の創作ノートに記された9番目の詩「ピアノ」が、ロレンスの文学のなかに占める特殊な重要性による。すなわちこの詩の作者は、「私に、荒々しいハンガリアの歌」を歌う女性とその「堂々たるつややかな黒い」ピアノを、「小さな茶色い」母親のピアノと、彼女が昔「私」に歌い聞かせた「讚美歌」或いは妹の愛の歌に比べる。追憶の世界に属する後者は、古いピアノが大きなピアノに圧倒されるように、「両腕と胸、その魂の全てがむき出しになった」女性の「魅惑的な生ける歌」に押しのけられる、と書く。過去の歌は、「この音楽の劇しい魅力」に「むさぶりつくされる」⁽⁴⁵⁾ というのである。

母親の生命力の衰退と、せり上ってくる「或る女」の力強さを描き分けたこの詩は、ロレンスの新しい人生のサイクルを告知する詩であるが、大学卒業後に作られたと推定されるこの詩の「或る女」とは誰なのか。当時交際のあった周囲の女性のなかから、この種のピアノの所有者と思しき、柄の大きい女性を見出すことは難しい。「ハンガリアの歌」といい「とどろくような」「巨大な黒いピアノ」といい、何かここには、控えめな英国の秩序を蹂躪する別種の世界の存在が感得される。ドイツ人で大柄なフリーダがこの女性であったと言え、実にしっくりと肚におさまる。しかし彼女は、1912年にはじめて、つまりこの詩が書かれたあと4年後にロレンスと出会することになっているのである。

フリーダの長男のモンタギュー (Montague) は、母親を回顧する談話のなかで、この「ピアノ」の詩に触れている。「母は何時間も、ピアノに向い、自分自身の伴奏で歌うのが好きだった。私はそれをよく覚えています」と語ったあと、同じ詩の「私に歌いかける或る女」という一節を(不正確にはあるが)反唱し、1939年の夏ニュー・メキシコに母親を訪ねた折にも、フリーダが一時間ピアノに坐って歌い続けた、と述懐している⁴⁶⁾。つまりモンタギューにとって、問題の「或る女」がフリーダであることは疑いの余地のないことであった。(彼の暗唱する「ピアノ」の詩には、創作ノートにはない「広間」という語が現れる。この語は1918年の『新詩集』(*New Poems*)のための改稿時に初めて採用され、『定本詩集』に同じ形で収録された。創作ノートの存在はモンタギューの感知するところではなかったから、彼は「或る女」をフリーダと同一視することにいささかの躊躇も覚えなかったに違いない。この詩の制作時期に関わる詳細な知識に災されない者には、「或る女」は自然にフリーダを印象させるということであろうか。)

ロレンスの『全詩集』(*The Complete Poems of D. H. Lawrence*)の編者ヴィヴィアン・デ・ソラ・ピント (Vivian de Sola Pinto) は、このピアノをコンサートグラント・ピアノとし、「或る女」は肩をあらわにしたイヴニング・

ドレスの歌手であると断定する⁴⁷⁾。しかし大学在学中ロレンスがその種のコンサートに行った形跡はないし、この解釈は、「ピアノ」の詩が何故 1918 年の『新詩集』以降、正反対の趣旨の詩に変わったかを説明できない。すなわち『新詩集』と『定本詩集』(*Collected Poems of D・H・Lawrence*)では、「その歌い手が、大きな黒いピアノのアパッショナートで、響きわたるのは甲斐ない」と書かれる。「幼児期の日々の輝き^{グラマー}が私を蔽い、私の成年は追憶の奔流に投ぜられて、私は追懐に児童のごとく泣く」⁴⁸⁾からであるが、第一冊目の創作ノートの詩はこれとは正反対の終結部をもっている。既述したごとく、「母の曲はこの音楽の孳猛な輝き^{グラマー}にむさぶりつくされる」という詩句が、第一冊目創作ノートの詩の終結部であり、別の創作ノートでそれは、「私は過去を憎む、あい、過去の、死んだ輝き^{グラマー}を憎む」⁴⁹⁾と改められ、いっそう顕著に、母親につながる過去が指弾されるのである。

コンサートで聴いた女性歌手の歌が、これほど異例かつ極端な改稿に帰結することは、ロレンスの他の改稿例に照して説明不可能な事態である。「或る女」が「たそがれの中で」歌うのも演奏会の会場風景にそぐわないが、その種の細事を論う前に、私はこの改稿には作者の甚しい好悪の念と、価値の変化が無理やりおしこめられたと考える。過去というものに対する評価が変わったのではなく、「或る女」への、作者の愛著と憎悪が入れ替ったということである。

フリーダとロレンスの関係が実質的に破綻するのは、1915 年夏から 17 年にかけてのことである。この時期の前後で、フリーダの面影をとどめる小説の作中人物とフリーダの代表する作品のなかの価値は、異なった描かれ方をする。『恋する女』(*Women in Love*)のアーシュラ (Ursula) は、おそらくフリーダの面影が肯定的な形で生き残った最後の女性である。以後の作品では、彼女は作者が積極的価値を託する主要な作中人物としては造形されない。私は『チャタレー夫人の恋人』(*Lady Chatterley's Lover*)のコニー (Connie) にフリーダの姿を認めないから、このことは第一次大戦以降に書かれたロレンスの全作品にあてはまる。紀行文に妻のフリーダを“q・b”(「女王蜂」の略)として示

す心理が、彼の平生の心理である。

それゆえ「ピアノ」の詩の改作は、「或る女性」をフリーダと仮定した場合にのみ最も合理的に説明しうる。22歳から30歳頃までのロレンスにとって現在と未来の新しい価値を担った「或る女」とそのピアノは、32歳のロレンスには、嵩高く喧騒な人間と物体でしかなかったということである。ポーア戦争の頃の記述として、フリーダ自身は、金曜の午後女性唱歌隊で歌ったと書いている⁵⁰⁾し、結婚後数年の内にウィークリー家にピアノが入ったことも確実である⁵¹⁾。彼女の次女バーバラ (Barbara) は、その回想記のなかで、(7歳という当時の年齢をまず考慮してかからねばならないとしても) メイの農場を母親と訪ねて馬に乗ったと述べ、その折にもフリーダが、^{バーナー}広間のピアノのそばに立って歌っていたと記しているのである⁵²⁾。

- 1) Martin Green, *The von Richthofen Sisters: The Triumphant and the Tragic Modes of Love* (New York: Basic Books, 1974).
- 2) Robert Lucas, *Frieda Lawrence: The Story of Frieda von Richthofen and D. H. Lawrence*, translated from the German by Geoffrey Skelton (London: Secker and Warburg, 1973).
- 3) この草稿は、1972年に出版されたデラヴァニによる同じ著作の英語訳改版には収録されていない。Emile Delavenay, *D. H. Lawrence: The Man and His Work: The Formative Years: 1885—1919*, translated from the French by Katharine M. Delavenay (London: Heinemann, 1972).
- 4) Emile Delavenay, *D. H. Lawrence: L'Homme et la genèse de son œuvre (1885—1919)* (Paris: Librairie C. Klincksieck, 1969), p. 117.
- 5) Harry T. Moore, *The Priest of Love: A Life of D. H. Lawrence*, revised edition (London: Heinemann, 1974, Pelican Books, 1976).
- 6) Keith Sagar, *The Life of D. H. Lawrence* (New York: Pantheon Books, 1980), p. 51.
- 7) *The Letters of D. H. Lawrence*, vol. 1, ed. by James T. Boulton (Cambridge: Cambridge University Press, 1979), p. 374.
- 8) Frieda Lawrence, *Not I, But the Wind.....*, first published (New York: Viking 1934) reprinted (London: Granada, 1983), p. 2.
- 9) 例えば所謂「馴落ち」のあと、メッツ滞在中のフリーダが Udo von Henning

なる男性と関係をもっていたことは、回想記に収録されたロレンスの手紙からも了解できる。ケンブリッジ大学出版局書簡集 vol. 1, p. 404, footnote 2 を参照のこと。

- 10) "Extracts from Jessie Chamber's Manuscript (MS. II)", in *D. H. Lawrence: L'Homme et la genèse de son œuvre (1885—1919)*, pp. 706—7.
- 11) *The Letters of D. H. Lawrence*, vol. 1, p. 377.
- 12) Jessie Chambers, *D. H. Lawrence: A Personal Record*, first published (London: Jonathan Cape, 1935) second edition (London: Frank, Cass and Co., 1965), p. 205. *Letters of D. H. Lawrence*, vol. 1, p. 337.
- 13) *D. H. Lawrence: A Personal Record*, pp. 206—213.
- 14) *Letters of D. H. Lawrence*, vol. 1, p. 381.
- 15) *D. H. Lawrence: A Personal Record*, p. 213.
- 16) *The Letters of D. H. Lawrence*, vol. 1, p. 384.
- 17) *Ibid.*, pp. 385—89.
- 18) Frieda Lawrence, *Memoirs and Correspondence*, ed. by E. W. Tedlock (London: Heinemann, 1961), p. 178. なおこの書簡の日付が1912年4月11日となっているのは5月11日の誤りである。
- 19) *The Letters of D. H. Lawrence*, vol. 1, pp. 389—90.
- 20) *Not I, But the Wind.....*, pp. 2—4.
- 21) *The Letters of D. H. Lawrence*, vol. 1, p. 350.
- 22) エイダが父親と 13 Queens Square に引越したのは1911年3月9日のことである。(*The Letters of D. H. Lawrence*, vol. 1, pp. 233, 236.) むろん 97 Lyn Croft, Eastwood 宛の書簡が転送された可能性は否定できない。
- 23) *Ibid.*, p. 350.
- 24) *Ibid.*, p. 366.
- 25) *Ibid.*, p. 368.
- 26) *Ibid.*, p. 394.
- 27) *Ibid.*, p. 392, n. 1.
- 28) *D. H. Lawrence: A Personal Record*, p. 206.
- 29) *The Letters of D. H. Lawrence*, vol. 1, p. 326.
- 30) G. H. Neville, *A Memoir of D. H. Lawrence* (Cambridge: Cambridge University Press, 1981), pp. 121—2.
- 31) "Mr. George Lawrence Talking to Mr. D. E. Gerard", Nottingham County Library.

- 32) *Memoirs and Correspondence*, pp. 161—63.
- 33) "Mr. William Ernest Lawrence Talking to Mr. D. E. Gerard", C12a, Nottingham County Library..
- 34) Keith Sagar, "Lawrence and Frieda: The Alternative Story", *The D. H. Lawrence Review*, vol. 9, no. 1 (Spring 1976), 123.
- 35) *The Letters of D. H. Lawrence*, vol. 1, pp. 412—5. ドイツから出されたサリー宛の最初の書簡は、彼女がロレンスとフリーダの間柄を了解していたという前提で書かれている。
- 36) Godfrey Cox, "Lawrence and Maisie Vallance", *Journal of D. H. Lawrence Society*, vol. 1, no. 2 (1977), 21.
- 37) "Mrs. Taylor Talking to Mr. D. E. Gerard", C82, Nottingham County Library 1980.
- 38) "Lawrence and Frieda: The Alternative Story".
- 39) "Mr. & Mrs. Bircumshaw Talking to Mr. D. E. Gerard", C128 b, Nottingham County Library.
- 40) *Memoirs and Correspondence*, p. 140.
- 41) Memoir by Enid C. Hilton, in *D. H. Lawrence: A Composite Biography*, ed. Edward Nehls (The University of Wisconsin Press, 1957) vol. 1, pp. 134—6.
- 42) *Ibid.* vol. 2, p. 25.
- 43) *Ibid.* vol. 1, p. 570, n 41,
- 44) *Ibid.* vol. 1, p. 247.
- 45) Holograph manuscript, 84 pp. in University of Nottingham Library. See *A Bibliography of D. H. Lawrence*, Warren Roberts, second edition, (Cambridge: Cambridge University Press, 1982), p. 500. なおこの詩は、Vivian de Sola Pinto, Warren Roberts 編 *The Complete Poems of D. H. Lawrence*, first published (1964), reprinted with minor revisions (London: Heinemann, 1967) の "Appendix III" p. 946 に印刷されたが、草稿に施された修正は再現していない。H. A. Mason, "Wounded Surgeons", *The Cambridge Quarterly*, vol. XI, no. 1, 204 は、Carole Ferrier の thesis からさらに詳しい草稿上の修正を紹介している。
- 46) "Mr. Montague Weekly Talking to Mr. D. E. Gerard", C124 a+b, Nottingham County Library.
- 47) V. de S. Pinto, "D. H. Lawrence: Letter-Writer and Craftsman in Verse: Some Hitherto Unpublished Material", *Renaissance and Modern Studies*, I (1970), 27.

- 48) *The Complete Poems of D. H. Lawrence*, p. 148.
 49) *A Bibliography of D. H. Lawrence*, p. 508. Cf. "Wounded Surgeons", p. 206.

なおこの草稿は、厳密に言うと「ピアノ」の詩の第3番目の草稿である。1916年1月15日頃、コーンウォールの St. Merryn の近郊 Porthcothan 滞在中のロレンスのもとに、イタリアの Lerici に住む Thomas Dunlop から古い草稿ノート3冊が届いた。うち2冊は、Nottingham University College の mark 入りのノートで、各々在学中、ラテン語及びフランス語、植物学の講義のために一部を使用したものであり、(W. Roberts の分類では E 317 と E 320. 1 に当たる。)「ピアノ」の第1草稿はラテン語フランス語用ノート (E 317) に現れる。3冊目のノート (E 320. 2) は黒い表紙のノートで、冒頭見開き2頁の左頁に "Udimore nr Rye" "Westenhanger nr Hythe" 等の控えがあり、右頁には、"Accounts at Porthcothan" として、"1st Jan 1915 Paid" に始まり "15 Jan Strongman" に至る11回の金銭出費が記されている。1915年はむしろロレンスの誤りであり、このメモが日々の記入によるものでないことは、"11 Jan" の次に "10 Jan" が来ることからほぼ確実であろう。つまりロレンスは、ノート入手後直ちに、コーンウォール到着後半月間の出費計7ポンド13シリング分を思い出して書き控えたのである。

ただ左頁に書かれた Udimore 等の地名はいずれも Dover 西方の地名であり、ロレンスがこの地域と関りをもつのは、1913年7月の Broadstairs 近郊 Kingsgate 滞在中のことと考えるのが妥当である。そうすると、左頁書きこみは1913年夏にイギリスを離れる以前のもの、右頁は、イタリアのフィアシェリーノ滞在を経て帰国後、1916年1月15日以降のものということになる。

ところで、この黒い表紙のノートには巻末から天地を逆にし、"1 Martyr" から "41 Reproach" に至る番号の付された41篇の詩と、その中間にあって抹消された5篇の詩、及び "41 Reproach" のあとに位置する "Blue" の詩が記されている。ラテン語・フランス語用大学ノートに書かれた第1草稿と同趣旨の「ピアノ」第2草稿は、第8番目の詩である。問題はこの詩群がいつ書かれたかということであるが、研究者の見解はおおよそ1916年1月とする見解に固まっている。事実、この詩群のあと見開きにして3面、頁数にして6頁の余白のあとに、やはり天地を逆にして、Lady Ottoline Morrell に詩集 *Amores* を捧げる献辞が3例認められている。この詩群からは *Amores* に38篇が採用され、ロレンスは同居中の Philip Heseltine にタイプ原稿2部を作ってもらい、1部は2月2日に agent の Pinker に、他の1部すなわち duplicate は、2月1日このノートをも含めた3冊の草稿ノートとともに、Ottoline Morrell 宛に郵送されたのである。私が抱く疑問は、常に紙の不足に

甘んじたロレンスが、(彼に宛てられた書簡が殆んど残存していないのは、それらが様々な用途に用いられたからである) 本当にこのノートを長期間白紙状態で放置したのかということと、かりに他の大学ノート2冊から詩集 *Amores* に採用する詩をこの黒の表紙のノートに書き写しながら改稿したのであれば、詩群に付された番号が、*Amores* の掲載順序との間に全く関連性をもたないのは何故か、という疑問である。

さて *New Poems* と同じ内容をもつ、大幅に改められた「ピアノ」の詩は、この黒い表紙のノートを再度天地を正しくして用い、巻頭から6頁分を経て書き込まれた“Apprehension”以下41篇の詩群の23番目に現れる。さらに難しいのは、これらが果して1916年1月31日までに書かれたものか、或いはさらに下って、オットリーヌから大学ノートが返還されたと考えられる1918年4月1日以降に書かれたものか、ということである。このノートは H. W. Clarke の個人蔵に係わるもので、私は未だ現物によって確める機会を得ない。マイクロフィルムではインクの色等が識別できないから断定はできないが、この詩群のほとんどの詩が *New Poems* に収録された事実を照すと、ロレンスは1918年6月、この詩集を編む時点で再度黒表紙のノートを使用したものであろう。“Apprehension”が *New Poems* 冒頭の詩であることもこの推論を支える筈である。(1918年6月18日付 Amy Lowell 宛書簡参照のこと)。

なおこの「ピアノ」の詩に関しては、Holly Laird, ‘The Poems of “Piano”’, *The D. H. Lawrence Review*, vol. 18, no. 1 (Spring 1985—86) が詳しい。

50) *Memoirs and Correspondence*, p. 171.

51) *Ibid.*, p. 78. フリーダの自伝小説 *And the Fulness Thereof*……の一節であるが、この小説は実話に基いていると判断してよい。

52) A Memoir by Barbara Weekley Barr, in *D. H. Lawrence: A Composite Biography*, vol. 1, pp. 162—3.

(一橋大学助教授)